

野上清玄子全集

第二十卷

岩波書店

野上彌生子全集 第二十卷

第十三回配本(全二十三卷)

一九八一年六月五日 発行

定価 三三〇〇円

著 者 野^{のみ}上^の彌^や生^え子^こ

発行者 緑 川 亨

発行所 〒101 東京都千代田区一ツ橋二丁目五番
鉄 道 沿 線 式 岩 波 書 店

電話 〇三・二六五・四二二
振替 東京六二六二四〇

印刷・精興社 製本・牧製本

落丁本・乱丁本はお取替いたします

© 野上彌生子 1981

目次

目次

山莊記	三
山彦	一四
まるい卵	一五
政治への開眼	一五
山莊より	一六
亮ちゃんのこと	一八
山窓閑筆	一九
日記の一節	二〇
新らしい歴史	二四
女の手帖	二八

エヂプトの幻想	二四
トルコ人	三二
五月の庭	三五
野葡萄	三〇
一匹の猫が二匹になつた話	三八
雄ちゃんのこと	四四
生活と叡智	三五
ソーニャ・コヴァレフスカヤ	六三
『婦人公論』巻頭言	三三
後記	四九

評論・隨筆
三

山
莊
記

明治節というより、天長節と呼んだ方が私たちには親しみのあるこの日に、雨が降るのは珍らしい。秋の美しい空も、今日だけは更に青く晴れやかに澄み透る感じで、盛りの黄菊白菊の花の中に迎えたこの一日の特別な気持は、明治時代に生れたひとのみが知っているものであらう。——山荘の窓硝子をはちばち叩く雨を眺めながら、いつの朝にもなくそんな思いにふけた。小学校にあがったばかりで日清戦争に出逢つてから、さて、今度で何度目のいくさか、とこれも明治仲間のH夫人と、昨夜指を折つて数えて見たりした感傷の名残である。

そのH夫人が、東京から引つ張つて来たブリキ屋を帰すので、キップの申告に行くところだと寄つてくれる。彼女のおかげで私の居間のストーヴにも煙突がついて、冬籠りの支度が出来あがつたのである。いつしよに駅まで行けば、このあいだ帰京した時、今日の祝日のために録音させた放送が聞かれる筈であつたが、冷たい雨に濡れるとすぐ風邪をひくので断念する。これまでも私は、ラジオに入れた自分の声を一度も聞いたことがない。自分の姿を、よその人のように眺めるに似た思いをしそうである。

午後になつてもなお降りしきる雨の中を、思いがけなくN氏が来訪。昨日の夜行で来られたのと。ちやうど貰いものの肉があつたので晩御飯を共にしながら、渡辺町の家が始末について相談する。

いよいよあの家を畳んで、Tは成城の若夫婦のもとへ移り、私はこのまま山で冬を過すにしても、どうして引越すかが苦勞の種であつたが、その場合は、店の荷馬車やリヤカーが廻されるだろうといつてくれる。何万冊にも及ぶ蔵書のこととはもう諦らめてしまつた。今となつては尋常の手段では運びだせないし、たとえ運びだしても、持つて行き場所がないが、せめてTの当面の研究や仕事に必要な書物は、身の廻りの物とともにぜひ安全にしておきたかつたので、彼のいつもながらの好意が有り難かつた。

一日の空襲さわぎの時はサイレンの鳴らし方からして間違ひ、交通も混乱に陥つたという。いつもそんなことを繰り返して、いよいよの場合は、いつたはどうするつもりであらう。(十一月三日)

一夜じゆう小雨がつづいて、朝は灰銀いろにしずかに明けた。太陽の隠れているところだけ、真珠いろの染^しみがぼつかりついている。少しばかり手に入れた葱を、今朝一番の高原電車であつたN氏に頼んで、東京の家にとどけて貰おうと思ひ、顔だけざつと洗つて出かける。彼はもう朝御飯をすまし、おべんとうのお結びが二つ、テラスに持ちだしたコンロの上に載つてゐるところ、いかにも男の自炊らしい。三分の立ち話で引き返し、人間のいない、濡れた落葉の道をざくざく踏んで歩きながら、落葉松の鉾型の樹頭だけわずかに残つてゐる葉が、薄い霧を通して射^きす微光で、夢幻的な青つばい金いろに輝くのを、なんと美しいことか、と思わず立ちどまつて眺めたりする。このあたりの落葉松は、

十八年まえにこの別荘村が出来た時、ほんの二尺足らずの苗木で植えたもので、今は若いながらど
家のもよい森になった。ゆるい坂道に出ると、両側を縁どる葉のない珈琲いろの木立が、この樹形の
特色で先細りに細まつて聳えているために、透視画風に見渡される行く手の、遠い真正面に現れた白
根山が、楔を嵌めこんだように見える。あたり前のことながら、はじめて気がついておもしろかつた。
うちの落葉松林に戻ると、霜ふり茸がどつさり出ていた。一昨日の雨の賜ものである。小径にしや
がんで採りはじめたら、すぐ両手にあまるほど採れた。この植林地帯はよその落葉松より十年以上も
古いので、こんなものもゆたからしい。それにしてもこの茸の白い細い軸はなんと長いだろう。その
うえ、奇妙に曲りくねつて土にもぐり、まるい美しい淡卵たんすいろのかさだけが覗のぞいている。それもあま
り大きくはならないから、どつさり出ているところは、なにか蒲公英の花でもむらがり咲いているか
のように見える。

今日の午後は、この山で冬越しをしようとする人たちがうちで会合することになっている。玄関前
をきれいに掃いたり、木炭を出したりする。急な裏梯子をつたつて、地下室になった物置から四貫俵
が抱えあげられるか、どうか。下手をすれば、溪谷の路に転がり落ちるので心配であつたが、一段の
ぼりに用心しながら、精いっぱい力で頑張つて成功。まだその程度の力があるのがうれしい。それ
に、起き抜けに出歩いたり、そんな働き仕事をしたり、十時近くまで動きまわつたので、さすがにお
なかが空いて、パンと紅茶だけの朝食もひどくおいしかった。

参会者十名。その他にも、万一の場合はいくら寒くともこの高原の家に住まおうとする人もあつて、私たちが、仮に冬季疎開会と名づけて組織しようとする団体は、二十一軒になつた。H 大学を中心として、すべて共同協力の精神で発展したこの些やかな別荘村の伝統を、私たちは、この際一層厳しく守つて行かなければならない。薪一本、木炭一片、じゃが薯一粒、葱一株も、事務所を通じて手に入るほどのものは、ともに分かちあつて行こうというのが会の趣旨であつた。

事務的な話がすんで、H・N 氏から時局談を少しばかり聞く。四度の出馬を敢てしたルーズベルトの相手なるデューイは、検事時代に大いに腕を振つたこと、美人の音楽家で、愛嬌ものの奥さんが、彼の人気の半分をあおつていることなど。——この老人の高官は、ややおしやべりで重味はないが、こんな話や、政界の内幕話などする時の記憶のよさは流石である。

事務所から白菜一俵とどく。六円五十銭。(十一月五日)

昨夜はよつびて風が高く鳴つた。明け方の冷えも近頃になく強かつたから、吹雪でも来たのではないかと、と床の中で氣遣いながら雨戸をあけて見る。雪ではなく、寒い曇り日であつた。浅間山は鋼鉄いろの中腹のみを現わし、頂上まで冷たい灰紫の雲に蔽われていた。森の木の葉が落ちるだけ落ち尽すにつれ、前庭の向側に、はるかに透いて見渡される山麓の長い台地には薄雪が降つて、茶つぽく黝ずんだ山肌の、髪が骨張つたところだけ際だつて白いのは、吹き溜まりになつていらしい。台地の

真上に、灰白い大きな雲が凍てついたように塊まつているが、左手のたかつなぎの山にまだ隠された太陽を反射して、縁だけが蒼ざめた樺色に染まつている。浅間のずつと上の空にかかつている雲も、同じ艶のない樺いろで、わずかに樹頭に残っていた落葉松の葉も、昨夜の風で悉く吹き散らされ、灰黒い、裸かの、粗い、鱗めいた皮をつけたまつすぐな幹が、同じ灰黒い枝で下の方だけは交錯しながらも、先細りの梢で、一本一本が稜型に、孤独に、ひっそりと立ちつづいているところ、いかにも寒林といった情景にひと晩で変わった。見ているうち、指先の覚えもないくらいになつたので、ホールの寒暖計を覗いて見たら四度であつた。

Kさんにお茶の買い入れを頼むハガキを書いただけで、今日はじやが薯を室に納めることで費した。これも会員がくじ引きで、順々に共同に掘つて貰つたもので、うちのは、冬籠りの部屋ときめた日当りのよい四畳半の窓のすぐまえに拵えさせたが、まるく盛りあげた土の屋根を見て、東京から訪ねて来た人などは、防空壕ですか、とみんな早合点する。私はその度に同じ返事をする。こんなところまで防空壕が要るようになっては、まさに一大事です。

地下三尺から凍る高原の冬は厳しく、長い。雪の解けるのはやつと五月で、暖い地方では新鮮な青物が出まわる頃に、ここでは漸く種子が蒔かれ、それが台所に役立つのは八月だから、その時分まで食べつないで行く野菜類を囲いこむのは、薪や木炭の十分な用意とともに、絶対に必要であることを説き聞かされ、それ程にしても端境いの六七月は、蕨、ぜんまい、この辺では「うりつば」と呼ぶき

ぼうし、その他の山菜、野草で土地のものは生きて行くという言葉は、冬籠りにたいする私の一種の甘い詩的空想を脅かした。中は暗い窖になつて、その隙間だけ小さい戸のついた、やつと這いこめるほどの狭い入口から、二俵近いじやが薯をどうにか運び入れるまで、重たいざるを抱えて、はいつたり、出たり、何遍したことか。序でに、玄関に置きつばなしにしてあつた白菜も俵から取りだし、一つ、一つ、新聞紙にくるんで仕舞いこんだ。あとは大根に、キャベツ、牛蒡、にんじんでも手にはひつたら——そんなことを思いながら、太陽が高くなるにつれて、ほかほか暖かくなつた室むろの前の枯芝に、モンペの足を投げだして一と休みしていると、大きな山蟻がなにか銜えて動きまわっている。窓から捨てた朝食のパン屑らしい。お前さんも精が出るのね。——山住みは森羅万象を精靈アニミストック的に感じさせる。こんなちつぽけな生きものさえ、都会で暮らしている時よりはずつと身近く親愛に見えるが、今日はことさらに自分も一匹の稍大きい蟻に過ぎないような気がした。

お昼飯を食べたのはもう三時であつた。それから机仕事をするのには頭もからだも疲れ過ぎているので、昨日から読みかけた、『アンナ・カレニナ』を取りあげる。蔵書の疎開を断念した時、せめてそれだけでもと思つて数百冊の岩波文庫を、小包で順々に送りだした。そのまま解きもせず押入に積みあげておいたが、包紙が最もひどく破れ、結いわき紐もはずれかけているのがあつたので、一冊引つ張りだして見たら、『アンナ・カレニナ』の三巻で、アンナがウロンスキイとのことを夫に打ちあけるところからはじまつていた。レヴィンがカルタ卓の白墨で、キティに結婚の申込みをするところも

ある。はじめて読んだ時から、もう何十年になるだろう。かなり古めかしく取っつきにくかったが、読んで行くうちにやつぱり引き込まれてしまった。夕方はまたひどく冷えて来たので、四畳半の方のストーヴを焚きつけ、その前に坐りこんで夜まで読み続ける。晩御飯はストーヴの上の穴で、読みながらゆでたうどんに、卵を一つ落してそれでした。(十一月六日)

夕方の五時二十分前、ふと西の窓を眺めたら、浅間の煙が長い、輝やかしい火焰になつて、麓の台地の牧場の上を、鼻曲はなまがりの方まで、棚曳ひないている。天翔ける天女ひめの領巾ひれといつても、こうまで麗わしくきらびやかではないであらう。右手の三尾根みつおねの空は、後側に沈んだばかりの太陽の名残りで蒼ざめた黄金いろに塗られている。浅間の煙は、ちょうど舞台の照明装置のように、その落日で彩色されているのである。山肌は、殆んど匂やかなともいたい灰紫で、空も灰がかつた真珠いろ。今日は朝からの晴れが一度も崩れず、終日あたたかな美しい日であつたから、夕暮れも清澄に明るく、こころも和なごむ眺めであつた。

夕映えは五分間で終つた。

今日の午後は白菜を洗い、明日塩をとつて来れば、すぐにも漬け込まれるようにした。ついでに配給の米もと思い、メリケン粉のはいつていた袋をあけて洗濯したり、またもや一日、冬籠りの家事で過した。今までの部屋から、四畳半の方への移転も終つた。南と西を受け、狭い部屋いっぱいに射

しこむ日光で、温室のように暖かい。夏のあいだは一番暑い場所として冷遇されていたのが、急に時を得たわけで、人間の社会にも、殊に戦争になつてから同じ現象が著しいのを思い合せておもしろかつた。さあ、ストーヴでも焚きつけて晩の御飯にしよう。そうして『アンナ・カレニナ』をよむことで、終日の骨折仕事の息抜きをしよう。(十一月七日)

昨夜はかすかに雨の音を聴いたが、朝は前庭に霜がまつ白であつた。こんな朝は太陽がのぼつても、しばらく真珠いろの雲の後側でたゆたい、青い空が出て来ない、と思つているうち、ぽつかり生卵を割るように晴れて美しい、暖かい光線がさんと降りそそぐところ、いかにも霜晴れである。

執筆は半ピラの原稿紙でやつと四枚。それでもペンは溝にはいつたから、続けさえすればだんだん沁りだすであろう。毎日一時頃に、交替で廻つて来る郵便屋はすべてで六人で、今日はＴさん。とどいたのは新聞紙一枚。一里半も離れている局から、それだけの用事で来てくれるわけである。その上、冬越しの十数軒は、すつかり廻ると四里はあるというこの別荘村のところどころに、森や丘陵を隔てて散在しているのだから、配達も生やさしい仕事ではない。それだけ私たちも、お茶の一杯でもさし出さないでは帰さないし、顔ぶれも長年変らないのだから、彼らは單なる郵便屋さんというより古馴染の訪問者である。ことに毎年誰よりも早くやつて来て、誰よりも遅くまで居据わり、郵便物も一番多く受けとる私には、彼らはもつとも親しい山住みの仲間であり、四千尺下の世界のニューズ、の忠

実な報告者たる意味に於いては、私の新聞紙であり、ラジオである。昨夜敵機は帝都に何機侵入したか、フィリッピンの攻防戦がいかに激烈になつたかを、いち早く知るのには彼らのおかげであつたから。なお私は、冬籠りに就いても彼らの経験を聞くのをつねに怠るまいとした。今日も、前庭の橡の樹の下に積んである枝を指して、あの何倍ぐらいあつたら冬が越せるかをたずねた。強風が吹くと、幹のつけ根から、ぼき、ぼき、高い音をたてて落ちる落葉松や、檜や、その他の雑木の枯枝は、土地でばやと呼ばれ、幾棚かの薪とともに、冬の大事な燃料として熱心に拾い集められるのであつた。あれは二束にも足りない、とTさんは答え、十五六束は是非要るが、そのうち雪でも来れば外仕事は出来ないから、集めるなら今のうちだ、という言葉が私をあわてさせた。月半ばには、兼ねて引き受けた結婚の仲人役を果たすために、帰京しなければならなかつた。かれこれで十日以上も滞京するとして、そのあいだにいいよ雪になつたら、と、それを怖れはじめたのであつた。朝からペンを執れば、午後には疲れて読書ぐらいしか出来ないのだから、早速ばや拾いにかかることにして、モンベ姿に身支度をして出かける。森つづきに並んでゐる数軒の友達の山荘は二三年閉めきりで、おびただしい落葉松の落枝も打つちやり放しなので、まずその辺からあさることにする。強健に茂るに任せた深い山草は、枯れても逞ましく横倒しになつて、たやすくは踏みこめず、ことに赤い実のついた茨の刺は、油断がならなかつた。私は鎌で邪魔ものを薙ぎ払い薙ぎ払い、新鮮な強い土の香のする下草の底から、一本一本引きずりだしては、おもての路に運んだ。夕方近くなる頃には、百二十本より少くはないと思